家庭科教育の視点からみる 参加型学校トイレづくりの現状と課題

青井美津穂*　青木香保里

1. 問題の所在と研究目的

近年、全国の小・中学校でトイレの改修が進んでいる。1996 年当時、学校のトイレは乱暴に使われ、また、清掃・メンテナンスが行き届いていないこともあり、多くの校舎のトイレが、子どもたちから５K(暗い・臭い・汚い・怖い・壊れている)と揶揄され、排便を我慢している子どもたちの存在が指摘された。学校のトイレは、学校内でもとりわけ老朽化が進んでいる。その一方で、いじめの温床や器物破壊といった学校トイレを取り巻く問題も依然として解決されていない。トイレをはじめとし、学校の環境を良くすれば、子どもたちにとって学校生活がより快適になり、いじめや器物破壊をなくすことができるのではないかと考える。

また近年、公立学校は教育の場にとどまらず、災害時の避難所や地域の交流の場としての役割を担うようになってきた。新潟県中越地震では、避難所のトイレの深刻さが指摘された[1]。在校生の数倍の人たちが避難してくる中で、校舎内のトイレが使えなかった上に数が不足したこと、仮設トイレが高齢者や障がいを持った人たちには使いづらかったことが挙げられる。また、トイレを我慢するために水分を控え、体調を崩し、エコノミークラス症候群を引き起こす人も見られた。東日本大震災では、仮設トイレがすぐに避難所に届かなかったことが問題視された[2]。仮設トイレが被災地の避難所に行き渡るまでに４日以上要した自治体は７割もあり、最も日数を要した自治体は 65 日であった。また、発生当初は寒さが厳しく、屋外に設置された仮設トイレの使用は困難であった。このように、災害時でも全ての人々が快適に使えるトイレが必要であると考える。

学校トイレの整備は、教育環境の向上のみならず、災害対策のほか、地域の生涯学習施設として扱うことで地域の人々の関わりと理解が深まり、学校を拠点とした安全なまちづくりに繋がることが期待できる。本研究では、子どもたちにいつまでも愛着を持ってもらえるトイレづくりとは何かを考える。そこで、特に参加型トイレづくりの効果について深く追究していく。参加型トイレづくりとは、計画の段階から子どもたちの意見も聞き、反映させたトイレをつくることである。トイレの改善に関して子どもたち全員が願っていることを議論し解決していくことは、コミュニケーションによる信頼関係の醸成と連帯感を育むだろう。さらに、完成の喜びを皆で分かち合うことにより、共感や感動が生まれ、トイレを大切に使う心や感謝の気持ちが芽生えるだろう。

また、トイレは教材の宝庫であると考える。子どもたち自身がトイレ改修の企画段階から参加することで、健康、環境、福祉、歴史、建築、地域社会など、様々なことをトイレから学ぶことができるだろう。現代の子どもたちが豊かな学校生活を送ることができるようにするために、トイレに着目した取り組みについて概観する。

＊愛知教育大学　教育学部　初等教育教員養成 家庭選修　４年

2.　現代の子ども

2.1　子どもたちの排泄状況

学校トイレについての子どもたちの意見を聞いたアンケート[3]では、小学生男子全体では２割の子どもが、小学生女子全体では３割の子どもが学校でおしっこをしたくなったら、我慢していると答えている（図１）。また学年別に見ると、男女ともに１年生では全ての子どもがしたくなったら学校ですると答えるものの、学年が上がるとおしっこを我慢する子どもたちがでてきている。なぜ学校でおしっこをしたくないのだろうか。男女ともに最も多い理由はトイレが汚い・臭いからである。その次に挙げられるのは、落ち着かないからである（図２）。

また、学校でうんちをしたくなったら、小学生男子全体では６割の子どもが、小学生女子全体では半数の子どもが我慢していると答えている（図３）。学年別に見ると、これもおしっこのときと同様に、男女ともに１年生では全ての子どもがしたくなったら学校ですると答えるものの、学年が上がるとうんちを我慢する子どもたちがでてきている。その理由としては、おしっこのときと同様にトイレが汚い・臭いから、次いで落ち着かないからである（図４）。それに加え、恥ずかしいからやからかわれるからという理由を挙げた子どもが３～４割いる。

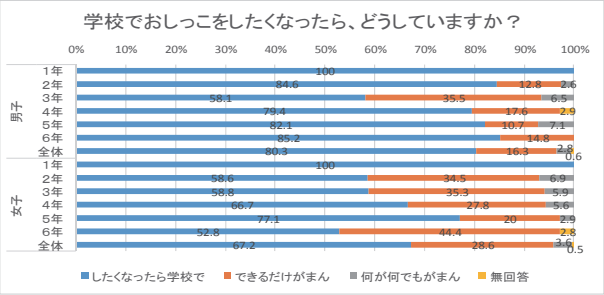
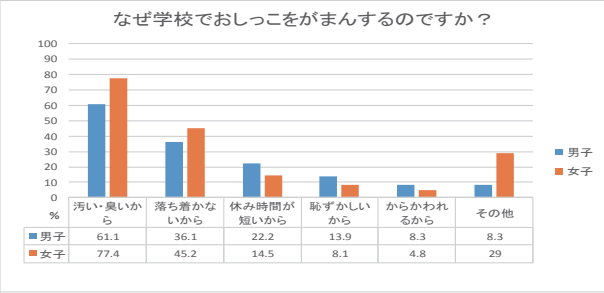


図１　学校でおしっこをするか



%	汚い・臭いから	落ち着かないから	休み時間が短いから	恥ずかしいから	からかわれるから	その他
男子	61.1	36.1	22.2	13.9	8.3	8.3
女子	77.4	45.2	14.5	8.1	4.8	29

図２　学校でおしっこをしない理由

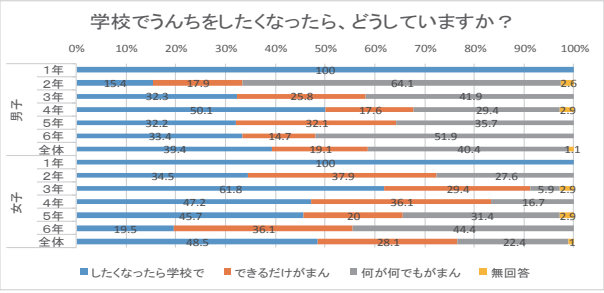
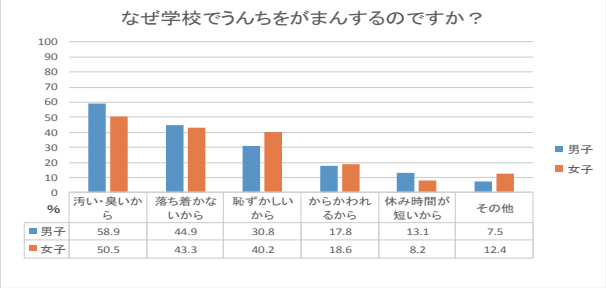


図３　学校でうんちをするか



%	汚い・臭いから	落ち着かないから	恥ずかしいから	からかわれるから	休み時間が短いから	その他
男子	58.9	44.9	30.8	17.8	13.1	7.5
女子	50.5	43.3	40.2	18.6	8.2	12.4

図４　学校でうんちをしない理由

2.2　子どもたちがトイレに行くことができない背景

アンケートの結果により、男女ともに汚い・臭いからという理由を挙げた子どもが過半数いる。このことから、学校トイレの老朽化が読み取れる。2009 年度全国自治体・公立小中学校トイレアンケート調査[4]によれば、小・中学校の 84%は築 20 年以上経っており、そのうち約５割の小・中学校が設立されてから一度もトイレを改修していない（図５・６）。古くて、未改修のトイレが数

多く残っているのが現状である。なぜ汚く、臭いトイレが常の姿となってしまったのだろうか。水洗化はされても、維持管理体制が伴わなかったことや、子どもたちにとって居心地のよいトイレ環境という視点が欠如していたことが考えられる。

また、トイレの清掃が行き届いていないことが考えられる。今、子どもたちに嫌われている汚くて、臭いトイレは、当初はきれいであっただろう。トイレは特に汚れやすく、壊され傷みやすい所である。トイレの快適さが持続できるかどうかは、利用者のマナーと清掃にかかっている。子どもたちのトイレのマナーの能力は発達に応じて培われるので仕方がないが、大人のマナーも心もとない状況にあることも事実である。加えて、清掃面ではトイレに限らず学校全体の清掃が未整備である場合が多い。清掃についての訓練がされていない子どもたちに清掃させるならば、それに対する教育が必要である。現状は、清掃指導もないまま、10～15 分足らずの時間でトイレ清掃を行っている。さらに、子どもたちのほとんどは家でトイレ掃除をしていない。清掃管理が今のままでは、せっかくトイレを快適に改修しても、すぐに元に戻ってしまう危険性がある。

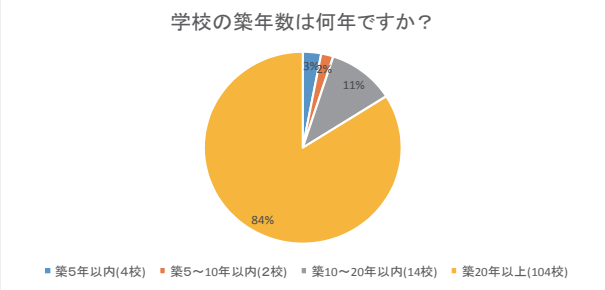


図５　学校の築年数

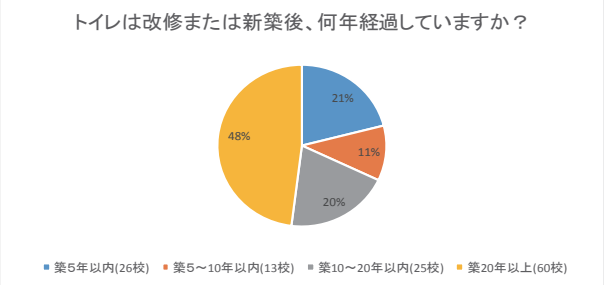


図６　トイレの経過年数

3.　人間と排泄

3.1　世界のトイレ事情

世界保健機関（WHO）は 1994 年時点で、地球上に安全な水供給を受けられない人が 11 億人、適切な衛生設備、つまりトイレを得られない人が 24 億人いると報告している。1999 年に国連児童基金（ユニセフ）、WHO などが調べた水と衛生設備に関する地域別の普及状況[5]によれば、アジアやアフリカなどの途上国の 3 割から 4 割の人々が安全な水を確保できない状況を強いられており、約半数の人々が適切なトイレを使うことができない。そのため、水に関連した疾患による死亡者数は下痢で 500 万人、腸チフスで 2 万 5000 人、コレラで 2 万人である。

途上国で安全な水や衛生設備を確保できない原因としては、絶対的に水が不足していることが考えられる。加えて、経済力や技術力がないため、水の供給設備や衛生設備を整備できない。それによって、排水処理設備が不十分なことで、汚水がそのまま河川などに流されてしまう。ここでは、アジア地域に位置する東ティモールのトイレ事情について詳しく見ていく。

東ティモールでは『nepia 千のトイレプロジェクト』が進められている。東ティモールは 2002 年に独立した国である。『nepia 千のトイレプロジェクト』とは、王子ネピア株式会社がトイレッ

トペーパーやティッシュペーパーの売り上げの一部をユニセフに寄付し、ユニセフが東ティモールのトイレの普及を支援するプロジェクトである。プロジェクト開始当初は、便器などのトイレに必要な物資を提供する支援を行っており、2008 年のプロジェクト開始以来、6200 個以上のトイレが完成した（2014 年 8 月現在）。不衛生な環境が原因で下痢などを患う人の数が減り、5 歳未満の乳幼児の死亡率も年々減少している。衛生的な水やトイレを手に入れることは、子どもたちが生き延びることにつながる。

しかしながら、ただトイレだけを普及しても、トイレの重要性を理解していなければ、トイレを使う習慣は身に付けることはできない。農村部の貧困層は適切な衛生習慣や知識が身に付いておらず、そのため家庭内や学校が不衛生な環境となっている。また、トイレの大切さについても認識が非常に低く、教師や地域の保健員にも衛生教育を行う能力が備わっていないため、すぐに新しいトイレも不衛生な場所と化してしまうだろう。そのため、現在では、トイレに必要な物資の提供のみに限らず、トリガリング（「気づき」を促すワークショップ）も行うことで、東ティモールの人々がトイレの大切さについて自覚し、自らトイレづくりに興味を持ち、トイレづくりをしたくなるようなトイレ教育に力を入れている。「トリガリング」の内容とは以下のものである[6]。

トリガリングは、村の人全員に参加してもらいます。

最初に、自分の家や道路のわかる、村の大きな地図を描きます。その中に、自分たちがうんちをした場所をマーキングします。ひとりでは、わずかな量でも、村人全員が集まると広い範囲に、たくさんの量のうんちが屋外にあることがわかります。

次に、実際にうんちをした場所を確認しに行き、そのうんちをスコップで拾っていきます。

地図の場所にもどったら、次のステップです。

きれいな水の入ったペットボトルが用意されています。その水をまず飲んでみます。きれいな水を飲むことには、抵抗はありません。今度は、蠅の足に見立てた髪の毛にうんちをつけて水にいれます。だれもその水を飲むことはできません。

そこで、外でうんちをすることが不衛生な環境をつくっていることに気づくことになります。その後、村の人たちでこの環境を変えるにはどうすればいいのか話し合いをして、トイレをつくる大切さを知ることになります。

このようにトイレに関するプロジェクトがある。発展途上国への支援は現状を見ると食糧支援が主流になっている。生活の水準を上げるためには、食糧に加え、排泄についてもしっかりと考える必要があるだろう。本当に健康になるためには、排泄に関する支援が欠かせないのである。

3.2　世界と日本のトイレ事情の比較からわかるトイレに必要なもの

東ティモールの人々は自分の排泄物の真摯に向き合っていることがわかる。自分たちが出した

排泄物をそのまま放っておくことで、不衛生な環境になってしまうため、どうすればよいのかよく考えることができている。

一方、日本ではどうであろうか。現代では汲み取るということをほとんどしなくなり、自分たちの出した排泄物はきれいに水で流される。もちろん汚水もしっかりとリサイクルされ、環境にやさしい処理ができている。さらに、日本のトイレの多くは快適な場所となり、着替え、休息、リラックスといったこともでき、もはや排泄のためだけの場所ではなくなっているのが現状である。しかしながら、残念なことに、日本の人々は世界と比較して、自分たちの排泄物を身近なものとして、十分に意識できていないように思われる。学校で子どもたちがトイレに行くことで、からかわれたり、恥ずかしい思いをしたりしてしまう原因であるだろう。排泄物を意識することによって、日本の人々の排泄意識が、さらにはトイレには何が必要かというトイレ自体にも関心が芽生えるのではないかと考える。それは、日本の中で出遅れている学校トイレにおいても視野を広げ、子どもたちにとって快適な学校トイレとは何か考えることに繋がるのではないだろうか。

3.3　災害時の避難所としての学校トイレの在り方

平時において、汚い・臭いという問題を除けば、トイレを通して排泄物は汚水処理施設に運ばれ、適切に処理され、臭いや害虫の発生・侵入を防ぐことができる。しかしながら、災害が発生した場合、トイレに関する多くの問題が発生してしまう。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、避難所におけるトイレをめぐる問題が浮き彫りになった[7]。災害時には、仮設トイレをすぐに避難所に届けることは困難であり、トイレの個数よりも被災者数が大幅に上回る事態となった。そのため、地震発生から数日間で、トイレは排泄物の山となり、衛生環境が極めて悪くなったところも少なくない（図７）。トイレの数もバキューム車も不足していたため、汲み取り式のトイレのほとんどが使用不可能になった（図８）。

また、発生当初は寒さが非常に厳しく、屋外に設置された仮設トイレ（図９）の使用は困難であった。さらに、トイレの設置場所が暗い、和式トイレである、段差があるなどの問題により、障がい者・高齢者・女性・子どもにとって使用しにくいものであった（図１０）。このことから、人々はトイレの使用を極力減らすために、水分や食事を控え、被災者の人々の心身の機能の低下や様々な疾患の発生・悪化を引き起こした。

水洗トイレが機能しなくなると、排泄物の処理が不可能となる。排泄物における細菌から、害虫の発生や感染症が引き起こされる。また、排泄物がトイレに残ることで、トイレが不衛生になり、被災者の人々は不快な思いをするだろう。不衛生なトイレを使いたいとは誰しもが思わない。トイレの使用をためらうことで、水分や食事を控えるようになり、結果として被災者は脱水症状、栄養失調、エコノミークラス症候群などの健康障害を引き起こす危険がある。

被災者の人々の避難所として主に学校が使われるが、学校によってはトイレの数が極めて少ないことも問題視される。加えて、学校トイレや災害時に設置する仮設トイレは和式トイレが多い

ため、車いすを使う身体障がい者や高齢者の人々にとって、トイレの使用が非常に困難である。

このように、災害時のトイレの課題は被災者の人々に多くの衛生環境の悪化や健康被害をもたらす。被災者支援において、食糧や避難所の提供などだけではなく、避難生活で必ず必要となるトイレについても真摯に着目し、今まで以上にしっかり意識をして考えていくべきである。学校トイレの課題は子どもたちが感じる５Ｋだけではなく、災害時の避難所としての課題についても視野を広げ、全ての人々が平時でも、災害時でも快適に使えるトイレが必要であると考える。

図７　東日本大震災における避難所のトイレ

図８　汲み取り作業の様子

図９　屋外に設置された仮設トイレ

図１０　椅子の座面をくり抜いて応急的に工夫した事例

4.　家庭科教育と排泄

4.1　学校現場での取り組み

神戸市立池田小学校と長田区ユニバーサルデザイン研究会はユニバーサルデザインの学校づくりを行っている。池田小学校の立地する長田区は 1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の被災地の中でも、最も壊滅的な被害を受けた地域の一つである。池田小学校は奇跡的に被害が少なく、昭和 32 年に竣工した校舎を使い続けてきた。しかし、大震災に耐えた校舎も老朽化には耐えることができず､建て替えることとなった｡工期は平成 15 年 7 月から 17 年 3 月までであり、子どもたちが積極的に考えたユニバーサルデザインが取り入れられた新しい校舎が完成した。

「ユニバーサルデザイン（以下『ＵＤ』と表記する）」とは、車いすをつかう身体障がい者でも、高齢者でも、子どもでも、誰でも使いやすいデザインのことである。神戸市では、阪神・淡路大震災以後､大規模な公共建築物の建設にあたっては､「ＵＤ」を取り入れる方向で進められていた。

学校で「ＵＤ」の学習について担当したのは岡村仁美教諭である。池田小学校では以前から総合学習の中で福祉教育を継続していた。そのため、この延長として、池田小学校の子どもたちと

長田区ＵＤ研究会が一体となり、学校の「ＵＤ」化を目指した。この取り組みは平成 16 年 3 月に始まった。まず、ＵＤ研が実施案を作成し、池田小学校の各学年の先生たちと連日、実施内容の摺り合わせを行った。そして、同年 6 月 17 日に「ＵＤ」に配慮した学校づくりの授業が始まった。派遣講師は延べで 61 人、実施時間は 21 時限であった。トイレづくりにおいては、「ゆとりのあるスペース、使いやすさ、コミュニケーションの場」を目指している。その取り組みは次のようなものである[8]。

校舎のＵＤ化に挑戦したのは２年生から６年生までの全員。学年によってＵＤのテーマは違います。

まず、共通して「ＵＤって何？」という授業を受けます。その上で、各学年とも少人数のグループをつくって、それぞれの作業に当たりました。

２年生は「新しいトイレをつくろう～モザイクタイルづくり～」に挑戦。各トイレのシンボルともなるモザイク画に使うためのタイルのデザインを、「誰もが行きやすい、一目でわかるようなのがいいね」ということから考え始めました。３年生から６年生は「わかりやすいピクトグラム（絵文字）を作ろう」と、教室を始め特別教室などのサインデザインに取り組みました。

さらに５、６年生は「みんなにやさしい新校舎にしよう」というテーマで、どうすればよいかを考えました。明るく楽しいトイレづくりのために内装を選び、自分が取り組みたいところを分担して制作するなど、実際に形にして提案していきました。

トイレの色調を決めるにあたって、行ってみたいトイレはどんな色か、みんなで話し合いました。塗り絵のようにデザイン画（透視図）に着目しながら検討したのです。「はじめは奇抜な色も出ていました。ところが話し合いを進めるうちに、落ち着かへんのとちゃう？という意見も子どもたちから出てきたので安心しました」とは岡村先生の言葉。タイルの色彩に関しては、実物を見ながら検討されました。

また、「みんなで考えよう」というテーマでは、次のように具体的に考えるための手引きを用意しました。

①岡村さんは、初めて池田小学校に来ました。

②岡村さんは、来る途中にころんで、足をケガしています。

③岡村さんは、両手に荷物を持っています。

④岡村さんは、トイレに行ってから３階の教室に行き、そのあと１階の職員室に行こうとしています。

この４つの条件に対して「どのような工夫があったらいいのかな？」と問いかけて、子どもたちの考え方を引き出していきます。

このようにして検討されたさまざまなアイディアは、グループごとにまとめられた上で、それぞれがひとつの提案として、神戸市へ伝えられ、反映されました。

子どもたちの活動により、池田小学校は快適で機能的なトイレに変化した。一般教室階のトイレは、男女それぞれ独立しており、トイレの入り口は廊下から奥まった場所にある（図１１・１２）。多くの学校の手洗い場は廊下に配置されているが、今回の改築では廊下の奥まった位置に置かれている。これにより、廊下がすっきりするとともに、流しからはねた水が通行する子どもたちの上履きに引きずられ、廊下に汚れが広がることを防ぐことができる。また、窓を２方向に取り付け、明るく気持ちの良い空間となっている。流しは従来通り、学年の体格の発達段階に応じて、高さが調節されている。トイレの入り口は有効幅 970 ㎜の広い引き戸で、下部にはガードプレートが設けられており、車いすに疵が付くことを防止している。さらに、清掃方法として、トイレの入り口から洗面までが乾式、便器の置かれている部分が湿式を採用し、湿式と乾式を併用している（図１３・１４）。

１階のトイレは、学校開放時のことを考慮してつくられている。そのため、男女共にベビーチェアやベビーシートが設けられている（図１５・１６）。また、体育館棟と教室棟との間の玄関の付近には、外からも直接使えるトイレがつくられている（図１７）。学校開放時などで近隣住民が利用することを配慮し、多目的トイレとしての機能はもちろん、オストメイトにも対応した装備となっている（図１８）。

図１１

図１２

図１３

図１４

図１５

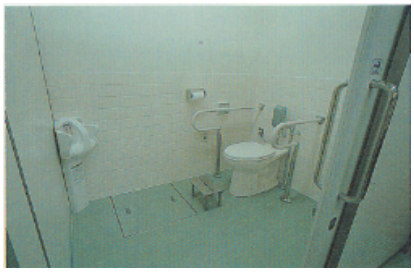


図１６

図１７

図１８

4.2　過去の実践の分析

池田小学校の実践は、学校の校舎の老朽化による改築の一環として、総合的な学習の時間の中で行われた。当時、校舎の工事が続いている最中であった。そのため、子どもたちは運動場に建てられた仮校舎の中で学習しており、非常に不便な環境にいた。体育の時には、近くの学校の校舎を借りていた。このような環境が、逆に子どもたちのＵＤやバリアフリーを考えるやる気を高めたのかもしれない。

この実践の良いところは、学年の発達段階に応じてテーマは違うが、全学年共通でＵＤについて考え、快適なトイレづくりに励んでいることである。具体的な内容としては、トイレを快適で誰でも行きたい場所にするためにはとの問いかけに対し、何か飾るものがあったらいいという意見があり、そこからモザイクタイル画を飾ろうという案が浮上したという。モザイクタイル画ならば、低学年も一緒にトイレづくりに参加することができるだろう。また、モザイクタイルの制作にあたっては、池田小学校の卒業生である地元のタイル屋さんに協力を得た。子どもたちが地域の人々と交流することで、地域の生涯学習を深めることができる。トイレづくりを通して、地域により愛着を持ってもらえるだろう。

また、池田小学校は阪神・淡路大震災を経験している。神戸市長田区ＵＤ研は、「震災復興に向けた活動をしている最中には人の顔が見えてくるんです。活動の目的はさまざまです。壊れたところを直したり、困っている人に手を貸したり。そこには自分だけという考え方はなかったように思います。このような活動をとおして、みながそれぞれに積み上げてきたものを振り返ってみると、非常時だけではなく日常的にも大切なことがたくさんありました。それらを組み合わせたらもっといい町ができるのではないか、そういった思いで色々な人たちに声をかけてＵＤ研を立ち上げました[9]。」と言う。震災やその後のか活動を経験して、神戸市長田区の人々は「感謝」や「優しさ」をよく実感していると言えるだろう。多くの学校で震災の記憶を語り継ぐ活動はしているものの、経験のないこどもたちが増えるにあたって、伝えることは難しくなってきている。しかし、最も大切なことは、震災などの災害時に何を守り、どのように行動するのか、そのために何が必要なのか知ることであるだろう。池田小学校の実践や子どもたちがつくった冊子（図１９）から、子どもたち自身が平時でも、災害時でも全ての人々が快適に使える　トイレとは何か考えることができているとわかる。

図１９　６年生がつくった冊子

4.3　参加型トイレづくりの効果と家庭科教育の今後の展望

神戸市立池田小学校以外にも、参加型トイレづくりを実践した教育委員会や学校は多くある。

参加型トイレづくりの効果の内容を要約すると、「子どもたちの意見が高まり、トイレに愛着を持ち大切に使うようになった」「トイレだけではなく、校舎全体も大切に使うようになった」「子どもたちや教職員に好評を得ている」「児童のみならず父兄の関心も高まった」「設計から生徒が参加することにより、学校施設への愛着と責任を持つ一助になっている」「好評であるが、今後の維持管理について学校での取り組みが肝要である」などの回答がある [10]。教職員は授業と校務に追われ、余裕がないことが現状であるが、学校全体そして地域全体で、参加型トイレづくりが学校の活性化につながるだろうという認識のもとに、一体となって取り組むことで、参加型トイレづくりに対し、大きな効果を期待することができる。

参加型トイレづくりの手法に決まりはないが、流れは大きく 4 つに分けられる [11]。

①問題点の抽出（興味・関心を抱く）

②解決策の検討とイメージづくり（主体性・創造性を培う）

③完成の喜び（共感・感動を得る）

④大切に使う心（公徳心の芽生え）

また、参加型トイレづくりは「総合的な学習の時間」のテーマとして用いられている場合が多いが、この参加型トイレづくりを「家庭科」を通して実践することが可能ではないかと考える。次期小学校新学習指導要領の「家庭科」の目標は、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次の通り育成することを目指す [12]。」である。それまで誰も問題にしなかった汚い・臭い学校トイレについて、生活環境上の課題と捉え、授業の中で取り上げることによって子どもたちの力を引き出し、トイレ改修を実現することができる。

さらに、「『生活の課題と実践』に関わる『Ａ家族・家庭生活』『Ｂ衣食住の生活』『Ｃ消費生活・環境』について、児童や学校、地域の実態を的確に捉えるとともに、内容相互の関連を図り、指導の効果を高めるようにすること。その際、他教科等との関連を明確にするとともに、中学校の学習を見据え、系統的に指導ができるようにすること [12]。」と明示されている。子どもたちはトイレ改修の実現により達成感を味わい、活動の中でトイレに関することだけではなく、健康・環境・福祉・歴史・建築・地域社会も知り，自分たちの判断でよりよいトイレとは何かなどの思考力や実践力を身に付けることができるだろう。また、2016 年 4 月に熊本地震、2018 年 6 月に大阪府北部地震、2018 年 9 月に北海道胆振東部地震を経験し、愛知県にも大きな災害が起こるかもしれないと不安を抱えており、防災の必要性を感じている人は多いだろう。子どもたちにとって防災に関わる題材は、身近なものであるとともに、主体的に関わることができる。平時でも、災害時でも全ての人々が快適に使えるトイレとは何か考えることが、子どもたちに防災を意識させることにつながる。

このように、家庭科教育の視点から参加型学校トイレづくりを行うことで、学んだ知識や技能を生かして問題を解決することができる力を育む機会をつくることができる。学校トイレは単な

る学校施設の一部ではなく、家庭科教育の題材として用いることができると考える。

5. 参加型トイレづくりの可能性とその課題

最後に参加型学校トイレづくりの可能性とその課題を述べる。先述したように、参加型トイレづくりに参加した子どもたちの学校トイレに対する意識の高まりや、トイレをいつまでも大切に使っていこうという気持ちの向上など、子どもたちの考えや行動の変化が明らかとなった。さらに、参加型トイレづくりを通じて体験した感動体験や達成感が子どもたちに伝わり、思考力や実践力を身に付けたことも確認された。学校トイレの改修に対する教育効果が見られる。

また、平時だけではなく、災害時のトイレの利用に関しても考えを深めることで、自主的にバリアフリーやユニバーサルデザインを学び、福祉や人権意識が生まれた。学校トイレは子どもたちだけではなく、障がい者や高齢者を含む地域の人々も使う。災害時の避難所としての課題についても視野を広げ、全ての人々が平時でも、災害時でも快適に使えるトイレについて考えることは、家庭科教育ならではの防災教育につながるであろう。家庭科教育で、防災について積極的に取り上げることは大切である。こうした点からも子どもたちの問題解決能力も着実に向上することができるように思われる。

しかし、学校トイレの改修実現はほど遠いだろう。学校トイレの問題には、校舎の建て替えや改修など、教職員や子どもたちの力だけでは解決できない問題と、日常の清掃やメンテナンスといった学校現場の努力で解決できる問題の二つが存在する。前者については、やはり参加型トイレづくりを実践したいという意欲はあるが、予算的措置が講じられなかったり、学校の協力がなかなか得られなかったりといった話が多く見られる。周囲の積極的な協力と、学校トイレをよりよいものにしたいという意識の共有がなくては成り立たない。

また、後者においては、快適な学校トイレへと改修しても、清掃管理が整っていなければ、せっかくトイレを快適に改修しても、すぐに元の汚い・臭いトイレへ戻ってしまう危険性がある。そのため、学校現場で子どもたちへ、トイレの使用マナーや清掃指導など、排泄教育を行うことが重要であると考える。今後は、改修された学校トイレの環境を維持するための整備と、子どもたちの使用マナーの更なる向上について追究していきたい。

註

1）学校のトイレ研究会 Vol.9『地域との絆を深める学校トイレ』（2006） p.3

2）内閣府（防災担当）『避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン』（2016）
http://www.bousai.go.jp/taisaku/.../1604hinanjo_toilet_guideline.pdf（2018 年 11 月 15 日閲覧）

3）小林純子『変わる学校のトイレ－子どもの思いを形にする』草土文化（2002） p p.12-14

4）学校のトイレ研究会研究誌 13 号『学校トイレの挑戦』（2010） p.12

5）上幸雄『ウンチとオシッコはどこへ行く』株式会社不空社（2004） p.113

6)『nepia 千のトイレプロジェクト』パンフレット

7) 内閣府（防災担当）『避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン』（2016） ｐｐ.3-4
http://www.bousai.go.jp/taisaku/.../1604hinanjo_toilet_guideline.pdf（2018 年 11 月 15 日閲覧）

8) 学校のトイレ研究会研究誌 vol.9『地域との絆を深める学校トイレ』（2006） ｐｐ.4-5

9) 学校のトイレ研究会研究誌 vol.9『地域との絆を深める学校トイレ』（2006） ｐｐ.8-9

10) 学校のトイレ研究会研究誌 vol.8『地域から生まれる新しい学校トイレ』（2005） ｐ.4

11) 学校のトイレ研究会研究誌 vol.10『参加型学校トイレのつくり方』（2007） ｐ.4

12)『小学校学習指導要領解説家庭科編』（2017） ｐ.12

13)『小学校学習指導要領解説家庭科編』（2017） ｐ.72

参考文献

学校のトイレ研究会 Vol.8『地域から生まれる新しい学校トイレ』（2005）

学校のトイレ研究会 Vol.9『地域との絆を深める学校トイレ』（2006）

学校のトイレ研究会 Vol.10『参加型学校トイレのつくり方』（2007）

学校のトイレ研究会 Vol.11『地域活動の核となる学校トイレ』（2008）

学校のトイレ研究会 13 号『学校トイレの挑戦』（2010）

小林純子『変わる学校のトイレー子どもの思いを形にする』草土文化（2002）

ローズ・ジョージ著大沢章子訳『トイレの話をしよう』ＮＨＫ出版（2009）

上幸雄『ウンチとオシッコはどこへ行く』不空社（2004）

会田法行『トイレをつくる　未来をつくる』ポプラ社（2014）

『nepia 千のトイレプロジェクト』　パンフレット

『小学校学習指導要領解説家庭科編』（2017）

『愛知県中学校技術・家庭科研究大会』　資料（2018）

知識明子『学校のトイレが変わった』月刊家庭科研究第 220 号（2003） ｐｐ.28-34

井上えり子・藤田加代・松本歩子・垣内良友・大嶺武也「子どもたちの生活とトイレ環境」
京都教育大学教育実践研究紀要第 6 号（2006） ｐｐ.135-144

井上えり子・藤田加代・水島あかね・前田明日香「子どもたちの生活とトイレ環境２」
京都教育大学環境教育研究年報第 15 号（2007） ｐｐ.11-22

井上えり子「京都教育大学における利用者参加型学校トイレ改善プロジェクト」
京都教育大学紀要 No.112（2008） ｐｐ.1-14

内閣府（防災担当）『避難所におけるトイレの確保・管理ガイドライン』（2016）
http://www.bousai.go.jp/taisaku/.../1604hinanjo_toilet_guideline.pdf　（2018 年 11 月 15 日閲覧）

外務省　東ティモール民主共和国
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/easttimor/index.html　（2018 年 11 月 29 日閲覧）